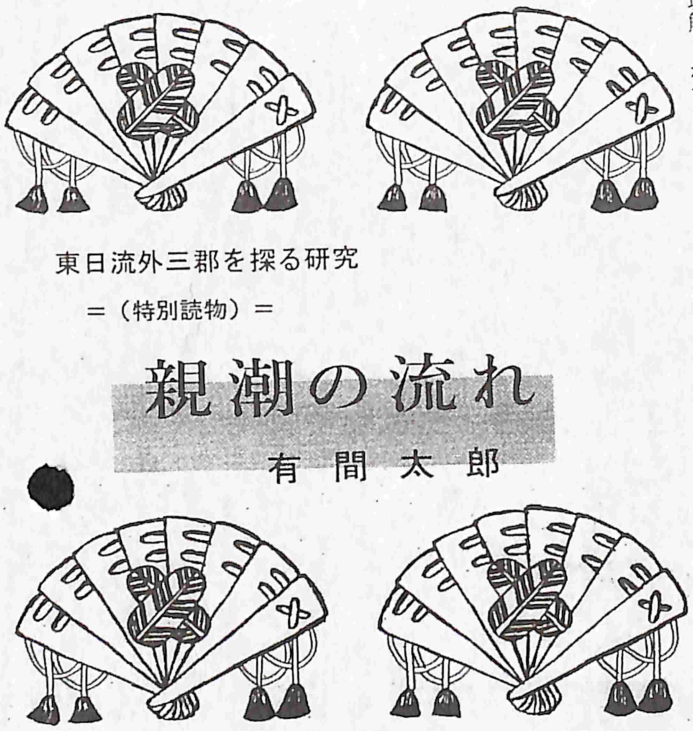


東日流外三郡を探る研究

＝（特別読物）＝

# 親潮の流れ

有間太郎

人類が先史時代の永い歩みのはてにやっと文化の段階にたどりついたのが、今より五・六千年前、文字が発明され、文字によってしるされたいろいろな記録が、エヂプト・ローマ・ギリシャ・印度・ナイル・黄河・揚子江流域より発見された。

これは神話的、あるいは伝説的な記録にすぎませんが、しかし確かに歴史叙述の始にはちがいないのであり、人間が過去現在にたいする反省、未来への見通しを少しでも持つようになった証拠とみることができる。

更に私達は先史文化の発達したこれらの地域はもちろん、今や各地より遺跡のない町や村は、まず皆無といえるくらい、考古学者の対象に日常的に接している。毎年数百ケ所もの遺跡が随所に発掘され、それぞれ証明され、参加者や見学者を喜ばしている。一方大都市周辺では、考古学的資料の展示会は、どこかしらで開かれている。東日流（ツガル）（津軽）においても、石器・縄文・弥生・古代・中世史期における遺跡や遺品など数多く存在するが、一統史・県史の中には、ほとんど解明されていないようである。これほど人びとに親しまれているわりに、その本質はどうも理解されていないのはどうしたことであろう。

## 『東日流（ツガル）を考える』

ここに私たちは『考古学とは何か』『歴史とは何か』『歴史から何を学ぶか』について認識を得る必要があろう。パスカル（一六二三―一六六二）の有名なことばを思わずにはいられない。『人間は一本の葦にすぎない。自然のなかで、もっとも弱いものである。が、人間は考える葦である』と語った。これは『人間は弱いものである。しかし人間のみが歴史をもち、また歴史を持つことを自覚する』といえないでしょうか。

古代オリエントの国々にあらわれた歴史学の起源は幼稚なものであるが、しかし歴史への自覚が生まれたということ、歴史的記録や文献などの中に秘められている先人の努力は、人類の発展史上画期的なことだった。以来三・四千年のあいだ歴史学はしだいに発展をとげる今日、歴史とは何かという根本問題をなげかけるに至った。

一方、わが国の歴史学・[illegible]学は誕生後まもなく、天皇制の抑圧の

下に、歴史学としての発展をおしとどめられ、国民と遊離したなかで個別的形態論にとじこもるという、変則的歴史を歩んできた。

この影響は当然に東日流にもわざわいを起し、外三郡（有間＝凡そ五所川原より小泊まで。江流間＝現在の西郡全部。奥法＝五所川原より藤崎まで）の地の古代、中世期の史実は全く焼失放棄せられ、津軽藩の権力に屈し、神社仏閣の所有する安東氏一族の遺跡、遺品、文化財はことごとく持出られ、ごく一部の古文書が長い間秘洞に『門外不出』として閉ざされていたのが、今やっとこの世にお目見得したのである。勝者だけの誇らしげな記録だけが、まばゆい光の中におかれ、他は一切不問にされていたのである。

従って、過去における歴史の上に押しつけられた歴史哲学は殆んど勝者の示威的誇大な記録が多く、東日流における古代、中世の記録が曲折せられ、さながら上代より君座したような津軽一統史は、私たちのふるさとの生立ちなど、全く記されていないのも、歴史としての価値をなくしている。

＊　＊　＊

歴史とは、常に現在と過去の対話であり、町や村に遺跡として存在するすべてのものとの厳しゅくな歴史哲学でなければならない。過去は過去ゆえに問題となるのではなく、私たちが生きる現在にとって意味の故に問題があり、現在とは、孤立した現在においてでなく、過去との関係を通じて明らかになるものである。

従って、時々刻々に現在が未来に食い込むにつれて、過去はその姿を新しくし、その意味を変更して行くもので、歴史とは常に新しい月で、過去を追究するものであり、過去の目が新しくならない限り、現代の新しさは本当に掴めないということである。

＊　＊　＊

人間は生れたときから、もう歴史のなかへ投げこまれており、歴史の地平でしか生きられない宿命にあり、過去と現在の歴史の構造、歴史学の作業、歴史家の使命等々について、私はみなさんと共に、考古学・歴史学のすすめを強調する者である。

ゲルハルト・リッター（一八八八―一九六七）は、『歴史的な思考や、歴史的な教養は、すべてのたかい文化の欠くべからざる生命的要素である。歴史は、他の何ものにもまして、社会的現実の教師である。歴史だけが、われわれの生いそだった土地を、われわれが生存し活動する場所の構造を教えしらせてくれるから。』とは、あまりにも有名な言葉である。

もとより、私達の住む東日流のふるさとは、語るべくして語りえなかった史実が数かぎりなく存在している。安東一族、奥州藤原の勢力圏に極めて平和であった私たちの故郷の周辺にある、古城跡、史跡、遺跡、神社、仏閣の発生、由来について、常に郷土史家に問いかけている課題を、私なりに記す。

## 『東日流（ツガル）の朝明け』（その一）

東日流外三郡誌については、安東氏の後胤である秋田孝季の苦難の史実である。この三郡とは、東日流大郡のうち、鼻和郡、田舎郡、平賀郡を内三郡といい、鎌倉幕府の配下にあったので、これを鎌倉役といった。外三郡とは、有間郡（アリマ）、恵留摩郡（イルマ）、奥法郡（オキノリ）と称し、直接京都の

朝廷方の支配下にあったので、京役（又は京師役）といった。

以前は、津軽は勿論のこと、羽州、糠部、国末（下北）、蝦夷（北海道）一円を支配した安東・安倍一族の勢力圏内であったが、応永二十年頃から嘉吉年間に、南部守行・義政に攻められ、安東一族は渡島（松前）に落ちて行った。残った飯積（飯詰）高楯城の朝日氏（藤原藤房の子景房の子行安）は最後まで残り、十三に検非違使庁を置いたのもその頃である。

検非違使は、景房の弟樺沢団右衛門である。天正十六年に久慈平蔵為信（津軽為信）のため数回にわたり攻められ、飯積高楯城は遂に落城し、城主朝日藤原行安は自刃し、為信は津軽を平征した。

これは、東日流における安東一族最后の戦であり、争乱であった。世にこれを津軽天正の乱といわれるが、青森県史の津軽一統史にも全く記録されておらないのはどうしたことであろうか。

なお、津軽藩以前の史実は全くなく、建武の中兵以来、藤崎城、金井城（金ケ浜）、岩崎城、中里城、青山城、福島城、唐川城、柴崎城の攻防の激戦史は故意に消滅されていったのであろうか町や村々に存在する史跡物語りも、中世史資料文献に乏しいことは、歴史家のひとしくなげく処である。

だが、この東日流の史実は、津軽藩のため抹殺され、後世に偽り伝えられるのを恐れて、安東・安倍氏の後胤である秋田孝季が、東日流の里、北は北海道松前・釧路・北見・網走に、南は富山・若狭の羽賀寺・紀州熊野・瀬戸内海因島・塩泡諸島・九州博多までたずね歩き、苦闘の末、八年間で書き上げたのが、東日流外三郡誌なのである。第一巻より第一一四巻及び、附巻を合せて一[illegible]八巻におよぶ膨大な巻数となっている。

＊　＊　＊

秋田孝季の祖は、福島城の系累であって、秋田土崎湊安東で、松前より羽州阿北へ移って、秋田氏を名乗ったのである。だが、徳川幕府の幕政によって、秋田へ佐竹氏を任じてより、秋田氏は福島の三春、三春から茨城の宍戸へ移封となって左遷され、廃藩置県の際に秋田子爵を賜わり、現在の当主は秋田一秀である。

秋田孝季は他領の地を巡りて、かん難しん苦をなめたことは想像もつかない程で、時には乞食となり、貧夫貧農となり、たく鉢僧となり漁夫、修験者に身を変化して回り、大半は野宿生活をしてまで、その解明に当ったことは、鬼神をも泣かしむる所であったという。

然も、この書巻の筆は、常に山奥深き秘洞において書き、極秘の上に、秘密を重ね、絶対に人の目にはつかないように配慮したという。

勿論外三郡誌のいずれの書巻にも、戒言一句を書きつらねている。それは『此の書巻は藩許得難く他見に及しては罪科を招く事必至なり依って他見に及ぼすべからず。門外不出を旨とせよ。固く守るべし』秋田孝季記と以上のように、若しこの事が知られたなら、一族すべてが死刑死罪にされるものであり、津軽藩は厳重に各村落に密偵を配置していたという。

勿論津軽藩では以上のような安東氏との戦記には一切ふれず、不問とされて、工藤日記・木立日記が作成され、合本されたのが永録日記となり、やがて津軽一統史を編成したものであり、今日これが現在の青森県史となっているのである。

全国各地各州を巡り、[illegible]をかけて作成された東日流外三郡誌は、

その后秘蔵され、若しこれを見るならば目がつぶれ、頭がくるい、あか腹となり、のめくりとなって一族が死ぬという家伝を綴り、堅固な箱に入れ、釘打ちされ、その上麻縄で結えられて、秘洞の中にこれを収め、今日まで二百年間全く世にかくされてあったのである。

莫として知れなかった『つがるのふるさと』の歩みに、初めて接った私の心境や、切々なるものがあり、涙がこみあげて、どうしようもなかった。

今まで全然わからなかった郷土の歴史が判明し、私たちの祖先のあゆみが次第にわかってきたことは、まことに得難い貴重な史料であり東日流の氏族性を最大限に表現したものである。

今一つ知っておかなければならないことは、この外三郡誌は、本元の秋田家には既に失われていたのである。それは秋田氏の菩提寺である補陀寺（秋田市郊外の松原部落）は火災に遭遇し、且又三春、宍戸へ移封となったためで、処がこの原本の写が、五所川原市の和田家に保管されていたのである。

和田家は、鎌倉時代の武将和田義盛の後胤で、北条方に叛して敗れ越後から東日流に入り、飯積に住み、代々神官を務め、後には庄屋にもなったといわれた。

秋田氏と和田家との関係については、孝季の妹『りく姫』が初代和田長三郎源吉次に嫁し親交し、二人で従者をつれずに諸国の安東氏足跡を調査して廻り歩いたのである。

孝季は元本一つでは、災害の場合、この記録が全く失われることをおそれて、長三郎に写を書かせ、これを大切に保管するよう配慮されたのであった。

＊　＊　＊

外三郡誌の第六巻の序言には、此の書は、拙者の遠者をたずね、日本八十二ケ国を巡脚し、写筆為したる綴なり、依って時代不順、文献不順の書巻となりしも、是を頭心に置き憶読なすべし、文献及び伝説諸翁姥の憶語りや、昔習神社仏閣祭しや、法要等に昔解の謎を解く鍵ありと悟り、諸国の山里を巡り得たるは、本書津軽藩法渡の東日流外三郡誌なり。

此の書を篇せるに当り、東日流飯積福泉の庄屋和田長三郎源吉次殿と親交し、吾妹『りく』を妻に興入り仕りてより、安東一族の往古歴を探究に及べり。

依って、安東一族の来歴は、幸いなる哉飯積邑大光院に秘蔵され、是をしるべに、蝦夷地に渡りて調べ、築紫・南海道までも巡脚し、共に移食し、また野宿もともにせし。長き年月を過して、茲にようやく解明の暁を得たり。また大光院の秘洞遺物文献に依りて、安東氏累代の解明に至れり。藤崎城・十三福島城・三千坊寺社来暦・山王唐川城・飯積高楯城歴代に渡る流転の古事来暦は、みな本書東日流外三郡誌に筆了せり。依って茲に此書を末代に秘蔵せんがために摩神山石塔に永代秘蔵書せり。是即ち藩政誅伐を隠密せんがためなり。拙者浅学盲筆なる故に偽字脱字あらば是を訂し、また加へてよしとす。

右以って拙者及び和田長三郎氏と共に喜憂の労もまた報はる事、右老婆心に他ならざるなり。

寛政五年二月

羽州土崎郡住　秋田孝季
奥州東日流住　和田長三郎

＊　＊　＊

第二十六巻　津軽藩史偽作審抄によれば、

享保十二年六月十三日、津軽五代藩主信寿殿、茲に藩祖津軽越中守為信殿の東日流平征史及び東日流古城史、寺社史を篇書なし、幕府藩史修正奉行に差納むべく江戸城御布令に依て、その急要に迫られ候、茲に藩主は、喜多屋校尉氏（喜多邑氏とも称す）にその篇書を申付候も、天正十年藩祖為信殿、東日流平征の[illegible]寺及び神社の諸文献、及び宝物を高丘城設集倉に引集候間、是を選捨収なし、往古の東日流史伝篇書難く、喜多邑氏茲に津軽一帯の神社仏閣及び古城跡を巡り、更に縁族を追求なし候も、祖来君亡の恨遺を亡脚なく、是に応答申者なし、亦喜多邑氏は不覚にも、飯積高楯城調踏の際、何者かが彼の肩深く弓箭を射たる者ありて重傷仕り、此の毒矢に治り難く、文武に才ある桜庭半兵衛、伊藤八右門、相坂兵右ェ門の外武芸奇抜の武士十人を付添えて巡検に及び候。

然るに、旧称東日流六郡の実史ぞ一篇だに筆走を得られず、人間に頼り、舘越に趣き、山崎勘右ェ門氏尋ね、古文献差出を申付くるや、山崎氏突如として欠居仕りて、行方不知となりぬ。その因は、此の山崎氏、行丘城北畠顕村の一系にて、秘蔵の文献で、大浦為信に対する呪書等古き挙兵血判状あるによりて、取急ぎ是を焼却仕りたる為、篇集の事を承るや、永禄日記なる家伝歴書を差出せり。さて此の永禄日記（以下一葉欠）朝日一族、南部一族なり、亦安東一族も然るなり。たれとなく北畠顕元誅伐の殺害起り、襲わることしばしばなれば、顕元自ら剣髪し僧となりて、諸士一族の祖霊に悔たり。然るに殺客の刃は顕元を継し顕定は藩主に救ひを求め、姓を木村と改め、名を儀兵衛となりて、鷹丘城下に忍住せり。かくして津軽一統誌の偽作成れり。

＊　＊　＊

依って此書を遺し置き、末代に真実なる世に伝うを願う者なり。

藩祖為信が東日流平征の口切り、古来の神社仏閣の宝物を奪取して曰く、東日流の祖は吾れなり、旧来なるものは何事も改め、互が意に徒うべしと、東日流内外六郡に古来より伝わる十三山王坊、通称十三千坊の社寺宝物及び仏像、また安東一族の寺社宝物及び仏像等、金剛

界、胎蔵界の仏像は、十三左衛門尉藤原秀栄に継ぐ。安東累代の庇護に建立されし唐来、韓来の宝物ばかりなり。

また東日流旧城諸藩の氏族、菩提寺、氏神の宝物はことごとく為信に奪取され、最上氏及び、羽柴氏、京師公卿等に、為信が藩主となるべき献立に献上され、実に怒念やるかたなき行為に候也。

旧東日流の実史撲滅、寺社の崇信攻めは津軽為信がまた、兼て企謀せし東日流平征の要にして、民心に至るまで侵了せし行為は、武人にありまじく得。陰謀奸策術数の限りをなして、久慈に在りし頃の野武士育ちの顕れなり。

依って、是等実相を流布さるるならば、津軽藩祖の名折はもとより外様大名たる津軽家の国交も致す処となるに及ぶに付、永禄日記を偽に書改め、北畠氏を誘抱して、津軽一統史の修成奸策実に以って不届千万に候也。

永禄日記の原書は、安東氏累代の庇護に依て召抱らる落人の実相及び、北畠顕家公累代の史暦や、万里小路中納言の累代、かたじくもかしこき処にて候は、寛政帝の御還幸や、天真名井宮（御村上天皇第二皇子）の御還幸等、網々に記されし実巻なるを、今にして焼却の彼方なりしも、その上の原本、東日流三坊録に一切遺れる故に安心なり。

ただ、津軽為信が笑止千万なる偽史に、己が祖を安東氏に。藤原十三左衛門尉秀栄の子孫、秀道の一系なりと偽称せしは、是れ容赦せざる系図侵駐の盗作なり。

是れ即ち藩主への犬尾振う輩、己が出世の偽作行為なり。世の移り人の変る代々ならば、偽も真実なる不動書とならん。依て拙者文筆つたなくも是を審らかにせん為に、是書を遺し、未代に藩史修改の証としておわんぬ。

宝歴十一年八月一日　　行立五郎和田刑部

以上原本を写し読者の判断にまかせる処であるが、史実は如何にして曲折されるかは、この一文で明らかな如く勝者のご都合によく書かれて、万民の足跡はひとかたもなく消滅された。

津軽のふるさとのあゆみは、かくして解明が困難となったことを知るべきである。

## 『東日流の朝明け』（その二）

伝承とはいえ、地名こそが史実を語る最大の証拠があるという。

東日流外三郡誌による伝説には、耶馬台国王安日彦（移夷地＝薄市）と長髄彦（立里＝種里）の一族が常住していて、その祖先は支那、韓民より渡ってきたと語っている。東日流に居を定めてより、これら大陸民族と混血して周落をつくり、東日流荒吐族の誕生となった。この荒吐とは、古代支那の君公子族に祭られる武の神にして、別称『虎伏え神』ともいう。

＊　＊　＊

倭国主長随彦には六人の王子と二人の姫があったので、夫々郡を与へて治めさせたのであるが、現在もなお語られている地名との関係を知ることができる。

それは、有間命、恵留摩命、阿瀬石命、平賀命、華和命、阿曽部命と外卒浜姫、糠部姫の八人の子どもが、夫々に治領を授けられて統治

したと語り継がれてきた。

＊　＊　＊

一方今の十三湖は当時、安東浦と総称し、十三の崎がある。鰊崎、唐崎、黒崎、目屋崎、荒磯崎、石化崎、藤崎、妙堂崎、田光崎、千貫崎、林崎、胡桃崎、出崎の十三崎を総称して、安東浦といい、この崎には、夫々の鎮守様が今も守神として存在するのである。

勿論大陸との交通の要所であり、今もこの地帯より、それに関連するいろいろな出土品をみることは少しも不思議ではないのである。

＊　＊　＊

このように勢力を伸ばしていった長髄彦は、奥州六郡をも手中に入れ、遂に侵領せる日子五瀬命を誅伐して南進し、種三毛渟麻命の領域を攻防した。また酒田、新潟、金沢に面する海域を突破し、若狭湾に根拠を定め、五畿七道の征服をもって、日の本の国王の夢をみたであろう。

日本海（即ち親潮）は長髄彦の桧舞台であったのであり全盛時代であったのである。

大和攻勢は長髄彦の最大の戦闘舞台となったのも紀元前三年のことで神武天皇の兄の命を亡ぼし、一時は大和朝の政治を停滞せしめ、最後の戦では苦戦し、遂に右腕斬断の肩傷を負うて、奥山東出河（北上川）の泉丘に安居し、なおも国主の座を守り、北方一族の礎を造ったのである。つまり、東北、北海道は、関東関西等大和朝に屈し、その一統下にありしも、独立国として屈服せず、大和よりみて常に戦領することあたわず、荒吐一族の支配する処となっていたのである。

＊　＊　＊

これより代々、茲に荒吐五王の掟を定めて、一族共に民衆を司治せしめ、永い年月平和な国を守りつづけたのである。

又長髄彦は肩の傷を愈して後、東日流移夷地（茨市）田の沢（黒崎邑）に永住し、神を鎮めて、茲に於て亡くなり埋葬され、現在もなお寺屋敷、塔場の沢、棺床（カンドコ）の沢の名残りを止めているのも、命の柩が埋葬されているからである。後に田の沢の水害に見舞われるため安日彦命と共に、視浦城下古墳の王瀬堂（オウセドウ）に二柱を埋葬したのが今日に至っている。

＊　＊　＊

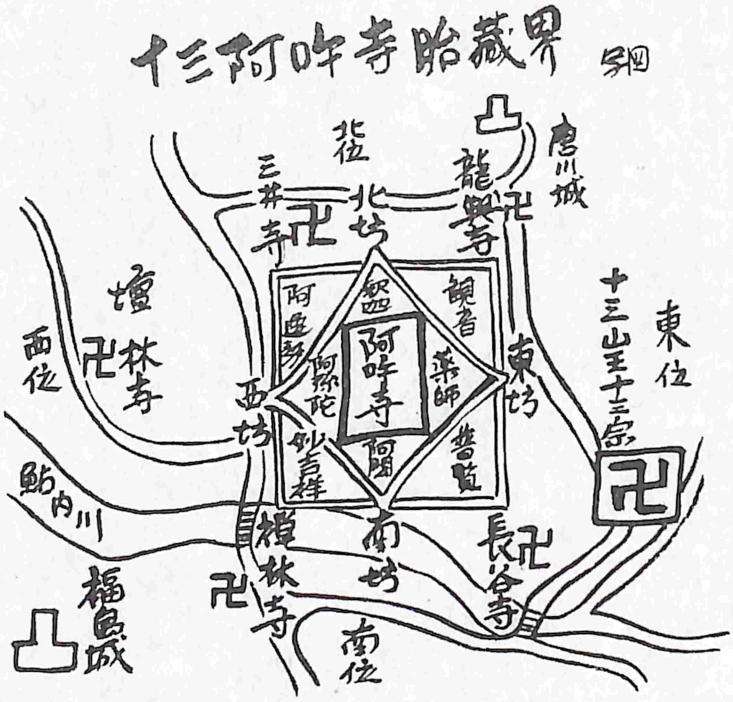
荒吐五王とは、一王を長能瓊彦、二王は弟荒吐茅彦、三王を風摩止利彦、四王津刈日高彦、五王に東羽吐彦（刈葺北見彦）を任じた。五王の大君主は長髄彦命である。この一族の大祖は、晋の国王、曲沃荘伯、其君の皇子、荒吐曲沃公なのである。

奥州六国に広領し、東国及び越の国、倭国をも討伐して、日本帝位（ヤマト）をも空位なさしめたこともあるは、先に述べたとおりであるが。

この後も、大和朝廷は、東北地方を蝦夷の地と呼び、伝説にある日本武尊が吾妻の山（栃木県と福島県境）まで攻めたこと、阿部比羅夫の征伐、坂上田村麿等、又源義家、源頼朝の攻略などからみて、東北は相当な勢力をもっていたことは、史実の上からも認められ、容易に大和朝には屈服しなかったのである。

＊　＊　＊

五王之治安、産業、経祀については、弥生式文化後期より古墳文化前期において行われたと見られるが、今日まで各地方からの出土品から推察されるところである。




当時の記録によれば

一、塩造、二、眠床造、三、皮部、四、土造、五、狩部、六、玉造、七、糠部、八、祀部、九、卜部、十、金造、十一、織部、十二、馬部、十三、稲部、十四、語部、十五、走部として、国造の業は、皆繁栄をきわめ、特に武農の階級などは全くなかったことである。

当時すでに稲を栽培し、放牧を盛んにして、肉食をとり、皮、毛類を衣服に用いていた。織物などもつくり、子孫のために占ないをし、予言などをなし、史実を長く伝えるために、諸々に語部なども配置したのである。

特に、支那、韓の百済、高麗、新羅との交易も著しく、安東将軍の弥号を得ていた。日本史の反正、允恭天皇の時代である。

だが、永い間の一族の拡張につれて、同族の分離、内訌があったことは事実で、一族間の闘争も長く続き、利害関係は更に強まり、七代にわたる安東一族にもようやく落日の時がおとづれ、強大な一族の耶馬台国五畿七道の奪回は果されず、荒吐五王の掟は遂に崩れ去ったのである。これが今日まで秘くされていた東日流の上古代の史実であった。

## 『東日流（ツガル）の朝明け』（その三）

安東氏七代の夢は破れ、降りて奥州五王が一族に合して、安部頼時が国長として君臨してからは、地方の豪族が武士となり、その者の権力が次第に強くなって行った。蝦夷管領職安東氏については、本県のみでなく、秋田県においても中世史上の惑星とされている。安東氏の足跡については上古史より平安、鎌倉、室町時代までは全国的に史跡を残しているにかかわらず、日本史の中にはほとんど史実となっていない。

これには、いろいろな事情のあることは、先に述べたような、ひとり津軽藩のとった処置だけではなさそうである。私が、この安東氏の足跡を求めているのも、この解明なくし

て、私たちのふるさとの歴史が存在しないからである。

安東一族の構成、その活動の足跡や遺品などについても、蝦夷管領職として長い間北海道一円を統治、鎌倉中期以後、元冠の役、特に建武の中興には、南朝派に属し、後醍醐天皇を擁立するために、その救出作戦に総力挙げて、室町時代後半までの活躍をしたことは、あらゆる古文書に散見する処である。

系統付けて把握したところでは、

晋の君公子＝神武東征の際長髄彦＝六皇子二姫＝兄安日と共に東日流安東浦に定住＝崇神帝の頃安倍河別命の蝦夷平征＝安日彦の孫安東の時代に安倍姓を賜った説。又応神天皇時代、蝦夷の反乱を鎮めた日下将軍と称号を与えられた致東代＝宝亀年間（七七〇～八〇）羽州鎮狄に任じられた高丸＝国東＝安倍頼良＝頼良（これが頼時だとする説）＝貞任・宗任＝高星丸が初代藤崎城主となった。

＊　＊　＊

一方、孝元帝の頃、出羽鎮狄将軍阿部比羅夫が、軍船一八〇隻をもって、有間の浜に攻めたるも、あまりにも巨大な勢力のために平征できず、大野に於て和睦の友好の策をもって、饗宴を開き、安倍の姓をさずけ、蝦夷管領職を与えた。

子孫＝家磨ー忠良ー頼良ー男の子がなく奥州平泉清衡ー秀衡の弟秀栄が初代福島城主となっている。

有間国には、稲城ー唐人舘ー視浦城ー福島城になった記録からみれば、既に三千年代を数えられ、始皇帝が除福に不老長寿の薬を求めて東の日出づる国にきたとは、伝承とはいえ[illegible]るさとの史実の深さが物語っていると思う。

＊　＊　＊

元慶の乱（八七八年）の戦が終って、奥州蝦夷の地は大和中央朝廷と和睦し、長く平和を保ったが、中央では摂関政治が栄えたのに反して、地方の政治は次第に混乱した。同族の内訌、武士階級の利害関係そして勢力争いが高まって行った。有名な平将門の乱、忠常の乱などと同様に、東日流においても、最初に始まったのが、安東氏内訌による『萩野台』の戦であった。

この戦は、藤崎城主安倍堯秀と福島城主藤原秀直との、安東氏内訌による争であった。

藤崎城においては、地勢の利により稲の作付がよく、面積が広なため米がたくさんあった。福島城十三方は、米などは少く、地域的産業として、放牧馬、野鹿が多く、更に地利的好条件に恵まれて、当時唐と貿易がはげしく、経済的に豊かであった。

このため、以前から双方の城主は、三年毎に城交代を行い、常に友好を保っていたのであるが、しばしば福島城主藤原秀直（初代秀栄ー二代秀元は造船技術修得のため唐に派遣された）は、地の利を有するために、この交代を拒否した事が問題となり、これが戦の原因となり秀直自ら六千の軍勢を引率つれて、藤崎城を攻略せんとした。

だが、藤崎城は周囲を堀にて固め、容易に攻めることが出来ず、南西の『萩の台』より戦を初めたが、遂に破れ、捕われの身となってしまった。もとより安倍一族の身である秀直を、藤崎城主はにくめども刑死させることができず、その武勇を認めて蝦夷の反乱を鎮圧せしめたのである。

秀直は十三山王にお参りし、蝦夷平征の武運を祈願し、翌年松前に渡り、三千の兵をひきい、日高、宗谷、北見、釧路、国後まで攻め、又一方酋長との和睦をはかり、三年の歳月をかけて、蝦夷平征を無事に終了して着任している。このように、地方豪族の力によって諸々の反乱を鎮め、地方武士団の勢力如力を示していった。

＊　＊　＊

ここで、もう一つ知っておかなければならないことは、奥州六郡（胆沢、和賀、江刺、紫波、稗貫、岩手）の六箇郡之司である東夷の酋長又は俘因の長と呼ばわれる豪族が台頭していることに、注目しなければならない。

『本朝続文粋』や『陸奥話記』の中に『奥州の中、東夷蜂起す』とあって、源頼義が奏状している。

元来、奥六郡は、安倍一族の勢力圏内にあったものであり、その権力を持続承継した安東氏が、この領土の主座を把っていたのである。

然しながら、前九年の役については、従来の蝦夷の反乱や、俘因の反乱とは本質的にその性質を異にしている。それは、代々の俘因の長安倍氏が、新しい権力を把り、奥州の各地に勢力圏を確立して、強大な六箇郡の司として、国司と対立したからである。

安倍頼時の世代になって『賦貢を納めず、用役もつとめず』という強制を誇ったことに対して、大和政府の支配する国司も代々にわたりどうする事も出来ずに過ぎ去ったが、永承六年（一〇五一年）遂に奥州国司藤原登任が安倍氏に対して攻撃を加えた事が、前九年の役の始まりである。

このときは、秋田城介平繁成も加たんしているが、共に破れ去っている。安倍一族の陸奥六郡は完全な独立国的な族長制を形成して、次々と隣郡を攻略し、奥州全域を支配しているから、国司側も朝廷の力を仰ぎ、当時武名の高かった源頼義が陸奥守兼鎮守府将軍として、さらに義家父子をも加えてこれに当った。だが一応これに対して、朝廷側より頼時に大赦令が出され和睦。帰順して事件はいったんおさまったのである。

ところが、国司側において、安倍頼時を中傷するものがあり、これを面白がらない頼時の長男貞任、宗任が、天喜四年（一〇五六年）に頼義一行が胆沢鎮守府からの帰り途、権守説貞の子光貞らを襲ったのが、有名な阿久利河事件が起ったのである。

このため朝廷側では正式に安倍氏一族に対して討伐することを命じた。だが、強力な安倍氏に対して戦局は、戦局は将軍頼義に不利に展開せず、そうしている中で、国司鎮守府将軍としての任期が切れた。しかし新任の国司藤原良綱は赴任せず、安倍氏をおそれていたのである。結局のはて、頼義は再任されて、鎮定に当ることとなったのである。

安倍氏においても、この長い間の闘争については疲れが増し、民衆からも見離され、遂に翌天喜五年になって、戦乱のさなか鳥海柵に於て頼時は戦死したのである。

なおも安倍氏は、貞任を中心にして結束を固め、頑強に抵抗をつづけたが、やがて民衆が遂次離れていった。『陸奥話記』は『人民皆前国頼義の指揮に従う』と史実に記録されたとおりで、衆望を身につけた頼義は、又々康平五年（一〇六二年）に任期が終り、陸奥守に高階経重が任命されたが、経重は之に従わず、遂に都朝廷に帰って行った。

ここで頼義は、戦力の建直しを謀り、国司としての劣勢の挽回に努力する。萬策のはて、出羽俘因長清原光則とその舎弟武則に応援を求めたため、貞任の弟宗任の居た小松柵を突破し、勢に助じて衣川柵、厨川柵を落城せしめることができた。この戦いで貞任は戦死、宗任、重任、家任は捕われた。

出羽の清原氏の援軍を得て鎮圧したのが、康平五年（一〇六二年）で、前後十二年に及んだので、古くからこの戦を、十二年合戦とも呼ばれた。

＊　＊　＊

安倍貞任の子千代童丸は、厨川で父と共に戦死したが、僅か三才の高星丸は乳母に抱かれて藤崎に逃れ、藤崎に安住し、城を築き、子孫代々が安東太郎と称して勢力を伸ばし、鎌倉時代中期以降に巨大な防備圏をつくりあげた。

岩崎城、吹浦城、追良瀬柵、立里城、日照舘、討大刀舘、石川城、阿曽内舘、目屋舘、相馬舘など築き、蝦夷管領安東氏の祖といわれ活躍することとなった。

更に、十三福島城、唐川城、青山城、紫崎城、脇元城、胡桃舘、菊川城、中里城、高楯城など、七ツ舘、神山舘も加えて、東日流は全域にわたって、完全武装の備えを強固ならしめていった。

## 『東日流の朝明け』（その四）

安倍一族が、前九年の役に破れ、乳母に抱かれて藤崎に落ちた高星丸について、東日流藤崎城に旧臣を集め[illegible]従来より伝承されてきた五王政を司り君臨し、東日流司令を創設した。戦に破れた安倍氏の各部族が相離れていたのを、ひそかに連絡をとって、総族をむかえ再興の機会をはかった。

武家諸法度を設けて土地、税役、傭役法度を定めた。又この法度の下部組織に兵、弓、馬司、奉行、参議、代司、勘定の諸制度をしいた。川造、田造、道造、家造、船造、橋造りを守り、これらの要所には水柵、土手、築港、溜池役を配置した。

又、築城夫、土方、農奴、船夫、仙夫、工部など六政を重んじた。特に築城夫の中には、秘洞守、開掘夫、宝庫洞の名城からくりは極秘に行われていた。

＊　＊　＊

安東氏の初代は安倍貞任の子高星丸で、その子堯恒のとき（寛治二年＝一〇八八年）に藤崎城を築き、別称藤崎太郎と名乗った。

『続群書類従』所収によれば、五畿七道を征服して大和に政権を樹立しようとした長髄彦と、兄安日彦が、神武天皇の東征に破れて、東日流安東浦に逃がれて居住した土地は移夷地となっていて、一方安日彦は日照田に居をかまえて安住の地とす。ひそかに再起をはかりしも時至らず、長髄彦亡くなって六年後に、日照田で安日彦も永眠されている。二柱は福島城の北側古墳に再葬され、これが王瀬堂の発生で、安日神社の名の社にたくさん記録されている。

この後、数代にわたり王城を築き、権政につとめたが、崇神天皇の代、安倍河別命が夷蝦を征したときに、安日命の子孫安東が先鋒をつとめたので、安倍姓を賜わったともいう。いづれにしても安倍の姓を名のる要因があったの[illegible]る。

理の藤原経清の未亡人（安倍頼時の娘）と武則とのあいだの子である家衡、および経清の遺児清衡があったことから、この一族の内輪争いが絶えることなく続けられて、遂に後三年の役となる。

陸奥守鎮守府将軍源義家は、いろいろな策謀をはかり、凡そ四年の才月をかけ、寛治元年（一〇八七年）義家の弟、義光が京都より職を辞めて馳せ参じ、金沢柵の激戦で、この事件をやっと鎮定したのである。奥州後三年合戦記にある、義家が雁の列の乱れるのをみて、伏兵を見破ったことのエピソードもこの戦いである。

これより清衡が大きな勢力を伸ばし、巨大な藤原氏四代（清衡・基衡・秀衡・泰衡）の平泉文化を築くこととなる。

＊　＊　＊

このころ、東日流の地は、どんなになっていただろうか。東日流外三郡は、五王之治安体制が確立し、南は藤崎城の安倍一族の支配下に置かれ、北は福島城（視浦城）安東一族が勢力圏を確立し、互に治安交流を密接にしていた。又一方三郡の邑創設の機構組織されていた。それは次のような区画をされていた。

江流間郡二十一ケ邑

十三（現在の十三）、下舞（下前）、分本（脇本）、視浦（相内）、御陀（太田）、今飯詰（今泉）、唐崎（七平）、三王坊（岩井）、三峯（山王奥）、浦内（五女月苑）船造（中島）、後夷地（薄市）、前夷地（昆布掛）泊（権現）、中里（宮川）、亀岡（舘岡）、唐木（金木）、帰来地（喜良市）、千賀（豊富）、大原（神原）、吉野（羽黒崎）、付属鍋越（母沢）、黒崎（高根）

一方奥州平泉においては、安倍一族にかわる清原氏の勢力と、その地位にも一族の内訌があり、次第に内輪争いが大きくなり、奥州全土にわたり兵乱をもたらした。これが後三年の役である。

清原氏の出身地は出羽国で、安倍氏のもとの領地を合せたもので、これより古代、陸奥国が奥州と出羽との二つの地名が発生している。

前九年の役より十一年の才月が流れて行った永保（一〇八三年）のことである。清原氏には嫡流真衡の系統と、前九年の役で敗死した亘